

白峰寺本『住吉物語』の再検討

——十行古活字本との先後関係をめぐって——

伊藤学人

流布本→古活字本

白峰本(など)

香川県坂出市の白峰寺には「延徳二年」(一四九〇)の奥書をもつ広本系の『住吉物語』写本(以下、白峰本と呼ぶ)が所蔵されている。白峰本は『住吉物語』諸本中、書写年代を記したものととしては最も古いので、これを重視する向きも多い。

しかし、筆者は、白峰本は到底「延徳」の成立ではあり得ないと考えている。内容を他本と比較検討してみた結果、蓋然性からみてあり得ないと判断せざるを得ないのである。

白峰本をめぐっては、かつて西下経一氏が「十行古活字本から発展してゐる」と考えられた。図式的に示せば△古活字本→白峰本▽ということになる(以下、十行古活字本のことを古活字本と呼ぶ)。

これに対して、友久武文氏は、流布本と古活字本との間にみられる大きな異同一二か所のうち、九か所までが白峰本と一致することから、「流布本を台として、白峰寺本を主に校合を行ない……文章を補入して」古活字本が成立した、と考えられた。図式的に示せば、

ということになる。そして現在、友久氏の説が定説となつている。さらに、最近、稲賀敬二先生が友久説に若干補足を加えられ、白峰本と古活字本の関係は直接的なものではなく、各々の近い祖本において接触があったという想定をされている。しかし、後述するように、両本の一致部分にはきわめて微細な差異しかなく、やはり直接関係は否定できないとみられるので、稲賀先生の説は若干難しいと思われる。

そこで、本稿では西下・友久両氏の説を再検討することとする。両氏の説を白峰本と古活字本との関係に絞る、簡略に図式化するならば、西下氏は△古活字本→白峰本▽と考えられ、友久氏は逆に△白峰本→古活字本▽と考えられたわけである。

一般に、二つの本の間に関係が想定される場合、その先後関係については、当然ながら、成立の古い(と思われる)方が他方に影響を与えた、と考えるのが普通である。今の場合、一方の白峰本は「延徳」の奥書もち、それに対して他方は古活字本——近世初

頭の成立——であるから、友久氏のように「白峰本——古活字本」と考えるのが普通ではあろう。むろん同氏はそれだけの理由で判断されているのではあるまいが、最大の拠りどころは「延徳二年」の奥書であると推測される。

しかし、もしこの奥書に信がおけないとすればどうなるのか。もちろんこの奥書がでたらめであるとは思わない。何かしかるべき理由があるのではあろう。しかしながら、白峰本の本文を、ほぼ同時期——室町中後期頃——の成立でかなり近い関係にあるとみられる他の伝本（あるいは成立は新しくとも、そこから派生しているとみられる伝本）と比較してみると、白峰本が「延徳」の成立であることの蓋然性はきわめて低いと言わざるを得ないのである。

本稿では白峰本の成り立ちを、もう一度振り出しに戻って再検討してみたいと思う。

二

上述のように、白峰本が重視される理由のひとつはその奥書にあるが、もうひとつの理由として、『風葉和歌集』（文永八年——二七一—成立）に収載されている『住吉物語』の和歌七首をすべて有している点⁽¹⁾があげられる。この点は白峰本を考えてゆく上で重要な手がかりとなるので、次に詳述する。

筆者は、改作『住吉物語』の原本は成田本系——大まかに言えば流布本系——の本文をもち、かつ『風葉集』の歌七首をすべて含む絵巻であったと考えている。ところが、絵巻として転写される際に、詞書料紙のスペースの都合から『風葉集』の歌二首が省略された系統が派生した。これが流布本の系統である。いま仮に、改作原

本の直系にあたり、『風葉集』の歌をすべて含む系統を「本家筋」と呼び、『風葉集』の歌二首が省略された流布本の系統を「分家筋」と呼ぶならば、「分家筋」は本文に若干の省略があるとみられるものの、比較的改作原本の面影をとどめていると推測される。一方「本家筋」の方は、その後——おそらく室町頃から——本文に増補の手が加えられ、広本系として成立したので、『風葉集』の歌はすべて保存しているものの、改作原本からはかなり隔たってしまったとみられる。したがって、『風葉集』の歌をすべて含むという理由で、その本が改作原本に近いと考えるならば、それは早計というもののなのである。

このように、白峰本をはじめとし、『風葉集』の歌をすべて含む、あるいは一首しか欠いていない広本系の諸本は、等しく「本家筋」から出ているとみられるので、白峰本を考えるときには、これら広本系諸本に共通する特徴を抽出し、それを白峰本と比較してみるのが最適の方法であると考えられる。その結果、白峰本が他の諸本と同じ傾向を示すならば、それは白峰本の古態を証明することになるし、もしも顕著な差異を示すならば、それは白峰本の特異性を証明することになる。特に、その特異性を示す箇所が仮に古活字本と一致するならば、単純に「白峰本——古活字本」と言えないことは自明の理である。蓋然性から言えば、むしろ「古活字本——白峰本」と考えざるを得ないのであるまいか。

以上のような見通しに立ち、本稿では白峰本を含む次の六本を比較してみたいと思う。

(1) 天理図書館蔵三好正慶旧蔵写本（以下、正慶本）——室町中後期成立

(2)宮内庁書陵部蔵写本（以下、御所本）——江戸初期成立
 (3)白峰本

(4)陽明文庫蔵近衛信尋筆写本（以下、陽明本）——江戸初期成立

(5)大東急記念文庫蔵一位局筆写本（以下、大東急本）——室町後期成立

(6)真銅策策氏蔵奈良絵本（以下、真銅本）——桃山期成立

友久氏は『住吉物語』諸本を略本から広本へ一八系統に分類されているが、それによれば、正慶本⁽³⁾一三類、御所本⁽²⁾一四類、白峰本⁽³⁾一五類、陽明本⁽⁴⁾一六類、大東急本⁽⁵⁾一七類、真銅本⁽⁶⁾一八類となり、同氏の分類から見ても近い関係にあることが首肯されよう。

次に、この六本について、『風葉集』に収載されている七首の歌

7	6	5	4	3	2	1			
×	○	○	○	○	○	○	正慶本		
○	○	○	×	○	○	○	御所本		
○	○	○	○	○	○	○	白峰本		
×	○	○	○	○	○	○	陽明本		
×	○	○	○	○	○	○	大東急本		
○	○	○	○	○	○	○	真銅本		

〔表1〕

の保存状態を一覧表にしてみると〔表1〕のようになる。（歌は物語の展開順に排列した。○印は保存していることを示し、×印は欠失を示す。以下同様。）

『風葉集』の歌をすべて保存しているのは白峰本と真銅本だけで、あとの四本は一首を欠いている。しかも、正慶本・陽明本・大東急本と御所本とは欠いている歌が異なっている。例

えば、正慶本と御所本はかなり近いところで祖本を共有するとみられるにもかかわらず、正慶本は7番の歌を欠き、御所本は4番の歌を欠いている。ということは、両本の共通祖本には当然4番も7番も含まれていたわけである。したがって、〔表1〕にみられる異同は、これらの六本が元来『風葉集』の七首をすべて含む八本筋筋[▽]から派生していること、そして伝本によってはその伝来の途上で固有の事情によりその一首を欠失したこと、を意味するものと考えられるのである。これらの諸本がきわめて近い関係にあることは疑いないのである。

三

まず白峰本の特異性を示すために二つほど例をあげてみる。少将は姫君の噂を耳にし、筑前という女を使って姫君に文を贈る。そのときの歌が、

はつしぐれ今日降りそむるもみぢ葉の色の深さは思ひしれとぞ
 伝本によって歌句に多少の異同があるので、適当と思
 われる形に改めた場合がある。表記は私に改めた。以
 下同様。

という歌であるが、白峰本はここにもう一首の歌をもっている。それは、

言の葉のつゆばかりだに知らねども色に出でけるわが思ひかな
 という歌である。この点を一覧表にして整理してみると〔表2〕のようになる。

	はつしぐれ		
言の葉の	×	○	正慶本
	×	○	御所本
	○	○	白峰本
	×	○	陽明本
	×	○	大東急本
	×	○	真銅本
	○	○	古活字本

〔表2〕

この「言の葉の」の歌は『住吉物語』諸本の歌の中ではきわめて特異な歌で、管見に入った限り白峰本と古活字本にしか存在しない。したがって、△白峰本→古活字本▽と想定するならば、古活字本を開版するとき、流布本と校合するための広本を探し求めたところ、その本が偶然にも多くの広本の中でもきわめて特異な歌をもつ白峰本であった、ということになるわけであるが、このような確率はきわめて低い。「表2」の中で考えてさえ1/6しかないのである。

さらに、白峰本が孤立した本文で他に類例が報告されていないのに対し、比較に用いた本の多くは同系統本がいくつも報告されており、かなり流布していた様子がうかがえることを考慮すると、実際の確率ももっと低くなることは疑いない。

また、仮に白峰本が天下の孤本で、しかも近世以前から同寺に伝来していたとすれば、古活字本を版行するために文化の中心である京都からわざわざ四国へ本を見に行った、ということになるが、そのようなことはまずあり得ない。△古活字本→白峰本▽と考へざるを得ないのである。

*

少将は姫君に文を贈ったが返事はなかった。そこで再び文を贈る

のであるが、そのときの歌が、

はまちどり跡ばかりだに知らねどもなはたづねみむしほの干る間を

という歌である。しかし、それでも返事がなかったので三たび文を贈る。それは、

たちかへりなほぞうらむるつらしとて思ひはつべきわが身ならねば

という歌である。次に、この部分について整理してみると〔表3〕のようになる。

	はまちどり		
たちかへり	○	○	正慶本
	○	○	御所本
	○	×	白峰本
	○	○	陽明本
	○	○	大東急本
	○	○	真銅本
	○	×	古活字本

〔表3〕

白峰本だけが「はまちどり」の歌を欠いており、この点で古活字本と一致している。しかも、一致点は単に「はまちどり」を欠いているということだけにとどまらない。「たちかへり」の歌を含む前後一八七字分が古活字本とはほぼ完全に一致しているのである（白峰本「此事かなへたらば」が古活字本では「此事かなへたらば」となっているといった程度の相違が二か所あるのみ）。

この場合についても△白峰本→古活字本▽と想定するならば、古活字本を上梓するにあたり、流布本と校合するための広本を探し求め白峰本を入手したところ、この本は偶然にも多くの広本の中でも「はまちどり」を欠く特異な本文をもって、ということにな

るのであるが、蓋然性からみてこの解釈が難しいことは上述の通りである。

以上の二例からでも、白峰本本文に対する筆者の疑念はある程度首肯されるものと思う。〔古活字本——白峰本〕と考えるのが順当なのである。

そうすると、おそらく『風葉集』の歌をすべて保存している白峰本が、二首を欠く古活字本の延長線上にあるはずがないではないか」とか、「白峰本の「延徳」の奥書についてはどう考えるのか」といった疑問が出て来ようが、それらについては以下、順次明らかにしてゆく。

四

先程から友久氏の説に疑問を表明して来たが、同氏の下された結論に対して筆者は見解を異にするものの、氏が流布本と古活字本の異同を精査され、その大きな異同の多くが白峰本と一致することを示されたのは、まことにすぐれた研究成果であり、本稿もこの成果に多大の恩恵をこうむっている。謝意を表しつつ、次にその古活字本における大きな異同一二か所を掲げる（各条の数字にカッコのないものは、その部分が白峰本と一致することを示し、カッコを付した条は白峰本と一致しないことを示す。行数は横山重『住吉物語集』一昭18、大岡山書店における行数である）。

1 冒頭から三六行分（異同）

2 少将が姫君に贈る「言の葉の」の歌（増加）

3 少将が再び姫君に贈る「たちかへり」の歌を含む前後七行分

（増加）

4 嵯峨野に遊ぶ姫君の姿を叙述した部分四行分（異同）

5 同じ場面、少将の「きみとわれ」の歌を含む前後五行分（増加）

6 同じ場面、「少将殿、たびたび歌などよみ給ひけり」の後、それを具体化した歌七首を含む二行分（増加）

7 姫君の返歌の後、少将と三の君の対話を中心とする部分二四行分（増加）

8 少将と侍従の対話の後、少将と三の君が「かれがれに成」つた、と述べる部分三行分（異同）

9 姫君が住吉へ逃れる舟中で「ふるさとを」の歌をよむ部分三行分（増加）

10 少将が鞍馬詣の途中池の辺で「わがごとく」の歌をよむ部分四分（増加）

11 姫君が都へ上る舟中で「ことのねを」の歌をよむ部分四行分（増加）

12 末尾「人に物を思はせ……」という教訓の部分四行分（増加）

以上一二か所が友久氏の指摘された流布本と古活字本の大きな異同部分である。そして同氏は「カッコをつけた⑨⑩⑪と、6の前半は、まだ同文関係にある本文を発見していないのであるが、残りは白峰寺本の本文を同文保存的に載入れたものであることは明らかである。つまり、流布本を台として、白峰寺本を主に校合を行ない、右にあげたような文章を補入していったところに、古活字本が成立したと考えられるのである」と結論されたのである。

友久氏の指摘された箇所について具体的に検討してゆくが、問題が複雑なので、整理しながらすすめる。

まず、流布本と古活字本の異同部分が白峰本と一致しない箇所について考えてみる（前掲⑨⑩⑪の条）。

⑨の「ふるさとを」の歌は、流布本系の代表的な本である天理図書館蔵藤井乙男旧蔵写本（藤井本）にはないが、これと殆ど同じ本文をもつ龍門文庫蔵十二行古活字本にはあるようなので、十行古活字本はこの系統の本を土台にしているとみられる。そうすると、十行古活字本と土台となった流布本との間に異同はないことになり、この条は問題とはならなくなる。

⑩の「わがごとく」の歌については、広本系の多くに共通する歌であるので、古活字本版行の際に、広本系の本文を参照して増補されたものと見て、まず間違いない。問題は、白峰本にもこのくんだりがあるにもかかわらず、なぜ古活字本と白峰本が一致していないのか、ということである。△白峰本——古活字本▽なら一致してよいはずではなかるうか。

⑪の「ことのねを」の歌は古活字本のほかには住吉神社蔵本しか見当たらない。本来ここには「はかなくてわが住みなれし……」という『風葉集』にも収載されている歌があったが、流布本系では早くに省略されてしまった。したがって、この「ことのねを」は後世の増補である。古活字本と住吉神社本のいずれが先かはつきりしないが、古活字本の方がはるかに流布範囲が広く、影響力も強いので、おそらく古活字本が原形であろう。古活字本開版時の創作とみ

られる。

以上の検討をまとめると、次の二点となる。

(1) 古活字本版行に際し、白峰本以外の広本が確実に関与している。

(2) 古活字本版行に際し、独自の創作があるらしい。

さて、古活字本と白峰本の一致部分について、蓋然性からみると△古活字本——白峰本▽と考えられることはすでに述べた。ところが、右の検討から明らかになったように、古活字本と白峰本の非一致部分については△白峰本以外の広本——古活字本▽という関係が想定されるわけである。したがって、この二つの部分は別の次元に属する問題であり、一元的に処理できる問題ではないということになるのである。

次に、古活字本と白峰本の一致箇所の検討に移るが、その前にこの一致箇所九か所（前掲1〜8、および12）の大半を占める1から8の部分が物語の中でどれほどの分量を占めているかを考えてみると、全体の約1/3ほどになる。例えば、三卷本の京都国立博物館の絵巻でいうと、ちょうど上巻分に該当する。そこで筆者は次のような物語を想定してみたのである。

＊

白峰本の親本にあたる△原・白峰本▽が近世初期頃に存在した。

この本は『延徳二年』の奥書をもち、△本家筋▽から派生した本の特徴として『風葉集』の歌をすべて保存していた。体裁は上中下三冊本であったが、上巻全体に損傷があり、また下巻巻末にもわずかに傷みがあった。この本は広本系であるから、当時目に触れ易かった流布本系に比して珍しく、これを古態の本文と考える関心を持った

人物〔X〕——この人物は学者的考証癖と好事家的術学趣味を合わせ持ったようなタイプの人物であったとみられる——が書写を企てた。その際、損傷のある上巻部分と下巻巻末を△補写▽して完本に復原しようと考えた。そこで当時入手しやすかった流布本と十行古活字本の二種類を用意し、まずこの二本を比較してみた。すると、十行古活字本には広本系の本文による増補があるので、その部分は△原・白峰本▽に近い。そこで〔X〕は流布本系に比した古活字本の増補・異同部分を古態と認定し、これを新たに書写する本——すなわち白峰本——の中にそのまま取り入れていった。(もちろん、必ずしも近世初期でなくともよいし、三冊本でなくともよい。一応の想定である。)

＊

以上のように推考されるのである。これ以外の解はまずあり得ないことを以下の考察を通じて明らかにしてゆく。

六

第三節の二つ目の例を振り返ってみよう。「表3」に示したように、大半の本には「はまちどり」と「たちかへり」の二首があるにもかかわらず、白峰本と古活字本だけが「はまちどり」を欠いている。

次に「はまちどり」を含む本の一例として正慶本の本文と白峰本とを対照して掲げてみる(正慶本は武山隆昭『住吉物語』——有精堂校注叢書・昭62、白峰本は友久武文『広本住吉物語集』に拠る)。

〔正慶本〕
 (姫君の姿は)をみなへしの露おもげにて、まがきのほかに倒れ出でたるけしきにて、そのこととなくあはれにもものいとほしく、

よそのたもとまでもとせきあへず」など申しければ、いよいよ心をそらになして「初めはさこそあれ。また聞こえさせよ。このことと言ひ叶へたらば、この世ならずこそ」とのたまへば、「年老ひたる者のかやうのことあたはぬことにて候へども、かく御心に深くおぼしたらむことをばいかでおろかには」と言へば、喜びてまたかくなむ、はまちどり跡ばかりだに知らねどもなほたづねみむしほの干る間を」と書き給へるを筑前取りて、かしこに参りて侍従に取らすれば、……(中略・四四六字分)……思ひはなちたるさまなれば、帰り

〔白峰本〕
 をみなへしの露おもげにて、まがきのほかに倒れ伏したる心地して、ものいとほしく、

よそのたもとまでも露けく候ひつる」と申しければ、少将はいよいよおぼしきで、いかにしてかあひ見むとぞ嘆き給ひける。「初めは文参らせたりとも、さこそあらむずれ。なほ文参らせ、よきやうにたばかり給へ。このこと申し叶へたらば、この世ならずうれしくこそ思はむずれ。心よきやうに申せ」とて、

よろづはづかしげにて見給はず。「このたびの御返事はせさ

せ給へ。

ぬ。少将にこのよし聞こゆれば、「さこそは思ひ給はめ。ただなほもまた聞こえよ。このこと叶はずは世にあるべくもなし」とてまたかくなむ、

たちかへりなほぞうらむ
るつらしとて思ひはつべ
きわが身ならねば

正慶本の枠内Ⅱ七五五字
白峰本の枠内Ⅱ一八七字

また侍従に取らせて、「このたびは御返事給へ。」

それぞれ枠で囲んだ部分が対応しており、なおかつ第三節で述べたように、白峰本の枠内一八七字が古活字本と一致しているわけである。

ところで、この「はまちどり」の歌については多少の問題があつて、広本系の諸本では上述の位置に少将の歌として存在するが、流布本系諸本では物語の後半部分、住吉へ出奔した姫君が都の父に書き送った長歌の反歌として出て来るのである。この問題についてはかつて考察を加えたことがあるので、詳細は拙稿を参照されたいが、要約すると、「はまちどり」は本来少将の歌として存在していたが、奈良絵本として制作された際、挿絵に書き込まれた「はまちどり」の歌が挿絵の貼りがえによって長歌の反歌として移動したのであるう、というものである。筆者の論について賛否はともかくとして、広本系が八本家筋Ⅴから出ているとみられることと歌意とを考慮すれば、「はまちどり」が少将の歌として上述の位置にあつた

とみる点については異論は出ないであらう。しかし、白峰本は少将の歌としてはむろんのこと、姫君の反歌としてもこの歌をもたない。白峰本の本文に疑問がもたれる所以である。

これに対して、古活字本は姫君の反歌としてこの歌をもっている。古活字本は流布本を土台にして成立しているもので、これは当然のことである。

したがって、白峰本の特異さに対する疑問は、上述の想定のように考えればきわめて簡単に説明がつく。すなわち、八原・白峰本Ⅴは他の五本と同じく、本来は少将の歌として「はまちどり」と「たちかへり」をもっていたが、伝来の途上でこの部分に損傷を受けていたので、古活字本によって補写した。古活字本では「はまちどり」が姫君の反歌となっており、少将の歌としては「たちかへり」のみなので、当然ながら白峰本には「たちかへり」しか存在せず、かつその前後の本文一八七字分が一致している。こうして白峰本では本来あるべき位置から「はまちどり」が消えてしまったわけであるが、一方八原・白峰本Ⅴの姫君の長歌の部分は損傷を受けていなかったもので、そこに古活字本の「はまちどり」が入ることもなく、したがって「はまちどり」は白峰本では全く姿を消してしまった。

以上のように考えれば、白峰本の特異さや古活字本との一致についての疑問は氷解してしまうのである。

すると、次のような疑問が生じるかもしれない。古活字本の「たちかへり」の部分は広本系によって増補されたのであらうから、その広本には蓋然性からみて「はまちどり」があつたはずなのに、なぜ古活字本のこの部分には「はまちどり」がないのか、という疑問である。

それについては、上述のように、古活字本の土台となった流布本には姫君の長歌の反歌として「はまちどり」が含まれていたの、これを増補すると重複することになる。そこで「はまちどり」を除いて「たちかへり」だけを増補した、と考えられるのである。

＊

少将は嵯峨野で子の日の小松引きに興ずる姫君を垣間見る。次の描写は姫君が嵯峨野へ到着し、車から降りたところである。

〔流布本〕

（姫君の）姿いとらうたく、うつくしなどいふもおろかなり。髪はうちぎの裾にゆたかにあまり、たけのほど、まみ、くちつき、いとあてやかに、こと人々よりも今ひとしほ匂ひ加はりてぞ見え給へば、これを人に見せばやおどろかれ給ふ。おのおの人ありとも知らで遊びあへるを、よくよく見給ひて、少将あぐがれて大なる松の下に居給へるを、

（藤井本）

右に掲げたのは、流布本と古活字本の異同部分であり、この部分の前後については両本は一致している。そしてこの異同部分について古活字本と白峰本が一致しているわけである（ただし白峰本は傍点部なし。また「松の下に」が「松の下え」）。

この点について、友久氏は、流布本に「白峰寺本の本文を同文保

〔古活字本〕

御姿いとけたかく、髪はうちぎの裾にゆたかにあまりて、うつくしき絵にかくとも、筆も及びがたくぞ見え給ひける。少将、これを見参らせて、世にはかくめてたき人も侍るにやとおぼして、大きな松の下にかくれ居給へるを、

存的に載入れ」て古活字本が成立した、と考えられているのであるが、異同部分を読み比べてみると、むしろ流布本の叙述の方が詳しく、白峰本本文を「載入れ」なければならぬ理由は全くない。同氏の説明はやや説得力を欠くと言わざるを得ない。

やはり八原・白峰本Vのこの部分に損傷があったので、古活字本によって補写した。損傷部分は異同部分より大きかったので、この異同部分全体を古態と認定してそのまま取り入れていった、ということではなからうか。

七

友久氏の指摘された箇所からははずれるが、白峰本について疑念をいだかせる箇所を二か所ほどあげておく。

右の嵯峨野の場面の前、前掲「はまちどり」の場面の後、少将は継母に謀られて継母腹の三の君と結婚することになるが、すぐに真相を知り姫君への思い断ちがたく、ある雪の日、姫君に文を贈る。そのときの歌を、最も多くの歌を含む正慶本によって掲げてみる。

- ① 白雪の世にふるかひはなけれども思ひ消えなむことぞ悲しき
- ② ふる雪の空に心のあくがれて人に知られぬものをこそ思へ
- ③ 消えゆかむことぞ悲しき白雪の世にふるかひはなき身なれども
- ④ かかる身は消えなば消えね白雪の世にふればこそ憂き目をも見れ

この部分について整理してみると「表4」のようになる。

一見、複雑な様相を呈しているように見える。しかし、広本系の諸本は「風葉集」の歌をすべて含む八本家筋Vの広本系祖本から出ていることは疑いなく、それゆえ「風葉集」の歌が伝流途上に固有

かかる身は	○	○	○	○	正慶本
消えゆかむ	○	×	×	○	御所本
ふる雪の	×	×	×	○	白峰本
	×	×	○	○	陽明本
	○	×	×	○	大東急本
	×	×	○	○	真銅本
	×	×	×	○	古活字本

〔表4〕

の事情で省略された本が多いように、この場合も本来は広本系祖本に①②④の三首存在していたものが、伝流途上に各々の事情で、正慶本は③が一首増補され(③の歌は殆ど①の歌の上句と下句を入れ替えたにすぎず、本来的なものとは思えない)、白峰本以外の四本は一首を失ったものとみられる。その中でただ一本、白峰本だけが、しかも『風葉集』の歌をすべて保存している白峰本が、①一首しかもたず、この点で古活字本と一致している点が注目される。△原・白峰本▽のこの部分に損傷があり、古活字本で補写したために、古活字本と同じく①一首しかもっていないものとみられる。

＊

少将は嵯峨野で姫君を垣間見てのち、ますます心惹かれてゆく。そうこうするうちに姫君の乳母(侍従の母)が没する。その四十九日が過ぎて少将は二人を弔問する。

広本系ではそのあたりに次のような歌がある(本によっては多少位置の異なるものもある)。

かくばかりさやかに照らす秋の夜より先に入る人ぞうき

少将が侍従に恨みごとを言ったのである。この歌について一覽表を作ってみると「表5」のようになる。

かくばかり					
○	正慶本				
○	御所本				
×	白峰本				
○	陽明本				
○	大東急本				
○	真銅本				
×	古活字本				

〔表5〕

の特異さが理解されよう。〔表2〕〔表3〕〔表4〕と全く同じ傾向を示しており、白峰本

やはり△原・白峰本▽の損傷を埋めるための古活字本に右の歌が存在しなかつたので白峰本にも見られない、と解釈される。

八

もうひとつ例をあげて締め括りとしてたい。右の例と順序が前後するが、少将が嵯峨野で姫君たちと歌を詠みかわす場面である。次に古活字本によってこの場面の歌だけを抜き出してみる。

①春霞たちへだつれど野辺に出てて松の緑を今日見つるかな(少将)

②片岡のまつとも知らで春の野にたち出でつらむことぞくやしき(中の君)

③君とわれ野辺の小松をよそに見て引かでや今日はたち帰るべき(少将)

④手もふれで今日はよそにて帰るなむ人見の岡の松のつらさよ(姫君)

⑤年を経て思ひそめてし片岡の松の緑は色深く見ゆ(少将)

⑥ほどもなき松の緑のいかなれば思ひそめつつ年を経ぬらむ(中の君)

⑦千代までと思ひそめける松なれば緑の色も深きなりけり(三の君)

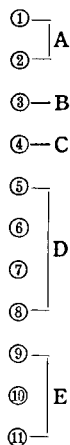
⑧子の日して春の霞にたちまじり小松が原に目を暮らすかな(姫君)

⑨わが宿にまだ訪れぬうぐひすの声する野辺に長居しつべし(三の君)

⑩初声はめづらしけれどうぐひすの鳴く野辺なればいざ帰らなむ(中の君)

⑪初声は今日ぞ聞きつるうぐひすの谷のと出でていく世経ぬらむ(少将)

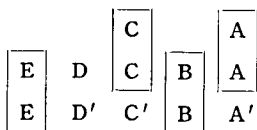
以上の十一首を含む本文を、論述の都合上、次のようにAからEの五つの部分に分ける。



このうちAとCは流布本にもあるので、B・D・Eの三つの部分が古活字本独自の増加部分となる。これに白峰本との関係を加えて図示してみると(図1)のようになる(枠で囲んだ部分は一致を示す。ダッシュは同内容だが本文は一致しない、の意。以下同様)。

流布本と古活字本の異同部分一二か所のうち、第五節で扱った三か所以外は基本的にすべて白峰本と一致するが、ただ一か所このDの部分(第四節に示した6番目の条の前半にあたる)だけが一致し

〔流布本〕
〔古活字本〕
〔白峰本〕



〔図1〕

ない。したがって、友久氏の考えられるように、流布本に白峰本を「同文保存的に裁入れ」て古活字本が成立したとすると、BとEの部分についてはうまく説明がつくが、Dについてはそれでは説明できない。同氏はDについて「まだ同文関係にある本文を発見していない」と述べられているので、他の広本による増補と考えられているようである。しかし、現実的にそのようなことが考えられるであろうか。白峰本にDに該当する本文がないのならばともかく、同内容の本文が存在するのであるから、この部分だけ他の広本に拠ったという説明は説得力を欠く。

また、氏の言われる通りであると、古活字本は、

- A || 流布本
- B || 白峰本
- C || 流布本
- D || 他の広本
- E || 白峰本

という構造となるが、ごく短い部分についてこのように複雑な操作をしなければならぬ必然性は全く認められない。

このような点から見ても、筆者の、△原・白峰本▽の損傷部分を古活字本によって補写したとする説の蓋然性の高さが理解されよう。すなわち、A'・C'・D'の部分は△原・白峰本▽に損傷がなかったものでこれを受継ぎ、BとEの部分を古活字本によって補ったとみ

られるのである。

そうすると、あるいは次のような疑問が生じるかもしれない。すなわち、△原・白峰本√の損傷部分と流布本系に比した古活字本の異同部分がそんなにうまく合致していたとは考え難い、という疑問である。たしかにこれは適確な疑問である。が、これに対しては次のような回答が用意されている。

古活字本のDの部分に含まれている7番目の歌は、

。千代までと思ひそめける松なれば緑の色も深きなりけり

であった。次に、これに対応する諸本の歌を掲げると、

〔正慶本〕

。色かへぬ草におくらむ松なれや千代経たれどもかひなかるらむ

〔御所本〕

。千代までと思ひそめける松なれば緑の色は深きなりけり

〔白峰本〕

。春霞たなびく野辺の姫小松いづれも千代のかげぞこもれる

〔陽明本〕

。露むすぶ草葉の中の松なれば千代もたもとにみえずあるかな

〔大東急本〕

。なし

〔真銅本〕

。君はさは松の緑にあらねどもひとしほまさる恋をこそすれ

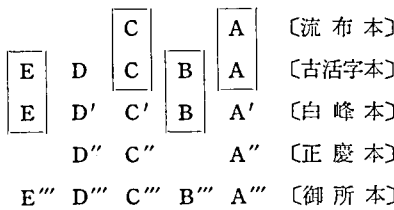
と、きわめて異同が多く、早い時期から様々に分岐していた様子がうかがえるが、その中では御所本が注目に値する。御所本の歌は古

活字本と全く同じ歌といってよいからである。御所本にはB・Eに該当する部分もあり、また第五節で考察した「わがごとく」の箇所

ももっていることから、古活字本は御所本のような本文で増補されたものとみられる(もちろん、この歌ひとつとりあげても完全に一致しているわけではないので、広く御所本系という意味である)。

したがって、古活字本と関係があるのは基本的に流布本と御所本系だけなのであって、そもそも古活字本と白峰本が一致するはずはないのである。ところが両本が一致している部分があるということは、古活字本による補写を考えるより他に仕方がないことになるのである。

そこで〔図2〕を参照されたい。この図は〔図1〕に参考として正慶本と御所本を加えたものである。



〔図2〕

上述のように、筆者は、△原・白峰本√が例えば御所本のようにA' E'''までの本文をもっていたと仮定して、そのB・Eの部分に損傷があったので古活字本のB・Eの部分を補入して白峰本が成立した、と考えるのである。

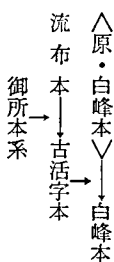
しかし、先に想定した疑問のように、△原・白峰本√の損傷部分と流布本に比した古活字本の異同部分がそんなにうまく合致するはずがない、と考える向きは正慶本に注目されるとよい。正慶本にはB・Eに該

当する部分がないのである。したがって、△原・白峰本√が正慶本のような本文であったとすると、白峰本の書写者〔X〕はB・Eの

異同部分を古態と認定してこれを補入していったと解釈できるわけである。第三節の最初の例で「言の葉の」の歌が補入されていたのと同じ原理である。

このように、△損傷による補写▽という説明が納得できなければ△補入▽と考えてもよいのであるが、いずれにせよ△古活字本→白峰本▽という線はまず動かない。

最後に筆者の考え方を図示しておくと、



ということになる。

九

友久氏の指摘された一二か所について、いくつかのポイントを押さえて考察してきた。その結果、流布本と古活字本の異同部分が白峰本と一致する部分と一致しない部分は別の次元に属する問題であり、一致する部分については△古活字本→白峰本▽、一致しない部分については△御所本系→古活字本▽と考えざるを得ないことが明らかになった。

したがって、友久氏の△白峰本→古活字本▽という説は逆であり、西下氏の△古活字本→白峰本▽が正しいことになる。ただし、『風葉集』の歌を二首欠く△分家筋▽の古活字本から、『風葉集』の歌をすべて含む△本家筋▽の白峰本が成立することはあり得ず、西下氏の言われることは古活字本と白峰本の一致部分において

のみ正しいのである。

最後に、それでは白峰本から古活字本による補写部分を除けば△原・白峰本▽が復原されるのか、という問題について考えておきたい。

もう一度、第六節の「はまちどり」の例を思い返してみよう。△原・白峰本▽には本来「はまちどり」と「たちかへり」の二首を含む本文があり、それが損傷していたので「たちかへり」の部分だけを古活字本によって補写したのであった。白峰本の書写者(△X)が古態と認定した古活字本の異同部分は一八七字分、これに対して掲出した正慶本の該当部分は七五五字分ある。つまり、正慶本を仮に△原・白峰本▽と見立てると、約1/4に縮約されてしまったことになる。実に3/4の部分が失われてしまったのである。

しかし、この場合は古活字本による補写があることで損傷部分が明らかになるだけまだよいと言える。流布本と古活字本に異同がない部分に損傷があった場合、書写者(△X)が古態と認定する本文がないわけであるから、その場合には一体どうするのか。当然、流布本(すなわち古活字本)を参照して適当に本文を綴り合わせてゆくしかないことになる。第七節であげた「白雪の」と「かくばかり」の部分を見れば、このことが明らかとなる。

しかし、この場合も、それでもまだ他の広本と比較する材料のある部分であるから損傷箇所であることがわかる。

仮に、これが流布本・広本のいずれにもある内容で、比較する材料のない箇所において損傷があり、その部分が流布本を参照して適当に恣意的に綴り合わされていたとしたら、どうなるのか。もはや我われにはそれを識別するすべがないのである。

そして、流布本と古活字本の異同部分の殆どが白峰本に撰取されているという事実は、この損傷が相当程度であったことをうかがわせ、白峰本本文に対する信頼性を大きく損ねる要因となるのである。

その他、白峰本独自の歌が多いことはこの書写者〔X〕の創作かもしれない、侍従と少将が唱和する「あかつきの」の連歌の形がくずれていること、姫君が都の父に書き送った長歌が改変されていること、等々を総合すると、筆者は補写部分を除いた残りの本文についても強い疑念をもたざるを得ないのである。

白峰本を、その奥書や『風葉集』の歌ゆえに重視することはきわめて危険な賭けであると言わざるを得ないのである。

(一九八九・三・二稿)

〔注〕

(1) 「住吉物語の形態に関する研究」(『岩波講座 日本文学』、昭和60)。

(2) 『広本住吉物語集』(中世文芸叢書11、広島中世文芸研究会、昭和42) 解題。

(3) 「王朝物語テキストの変貌契機・序説——『住吉物語』の背後に」(『物語歌集化』、『絵巻詞書化』本文を想定する——)(稲賀敬二編著『源氏物語の内と外』昭和62、風間書房)。

(4) 拙稿「住吉物語」諸本と絵巻詞書の関係——『風葉和歌集』所載和歌の欠落事情——(『国語と国文学』、昭和60・8)、『住吉物語』の改作についての私論——絵巻資料を中心に——(『中世文学』第31号、昭和61・5)など。

(5) 「住吉物語の諸伝本について」(『伝承文学研究』第20号、昭和52・7)。

(6) 桑原博史「中世物語研究——住吉物語論考」(昭和42、二文社)による。

(7) 拙稿「藤井本系『住吉物語』についての一考察——「はまちどり」の歌の位置と挿絵の関係——」(『国文学叢』第14号、昭和62・6)。